

立正安国論

沙門 日蓮勸ふ

旅客来つて嘆いて曰く、

近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲しまざる族敢へて一人も無し。

然る間、或いは「利剣即是」の文を専らにして西土教主の名を唱へ、或いは「衆病悉除」の願を持って東方如来の経を誦し、或いは「病即消滅不老不死」の詞を仰いで、法華真実の妙文を崇め、或いは「七難即滅七福即生」の句を信じて、百座百講の儀を調へ、有るいは秘密真言の教に因りて五瓶の水を灑ぎ、有るいは坐禅入定の儀を全うして、空觀の月を澄まし、若しくは七鬼神の号を書して干門に押し、若しくは五大力の形を図して万戸に懸け、若しくは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て、若しくは万民百姓を哀れんで、国主国宰の徳政を行ふ。

然りと雖も、唯肝胆を摧くのみにして、弥飢疫逼り、乞客目に溢れ死人眼に満てり。屍を臥せて觀と為し、尸を並べて橋と作す。

觀れば夫れ二離壁を合はせ、五緯珠を連ぬ。三宝世に在し、百王未だ窮まらざるに、此の世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是れ何なる禍に依り、是れ何なる誤りに由るや。

主人の曰く、

独り此の事を愁へて胸臆に憤悱す。客来つて共に嘆く。屢談話を致さん。

夫れ出家して道に入る者は、法に依りて仏を期するなり。而るに今神術も協はず、仏威も驗無し。具に当世の体を觀るに、愚にして後生の疑を發

す。然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。

情微管を傾け、聊か経文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く悪に帰す。故に善神国を捨てて相去り、聖人所を辞して還らず。是を以て魔来り鬼来り、災起り難起る。言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。

客の曰く、

天下の災、國中の難、余独り嘆くのみに非ず、衆皆悲しめり。今蘭室に入つて、初めて芳詞を承るに、神聖去り辞し、災難並び起るとは、何れの経に出でたるや。其の証拠を聞かん。

主人の曰く、

其の文繁多にして、其の証弘博なり。

金光明経に云く、

其の国土に於いて此の経有りと雖も、未だ嘗て流布せず。捨離の心を生じて聴聞せんことを樂はず。亦供養し、尊重し、讚歎せず。四部の衆、持經の人を見て、亦復尊重し、乃至供養すること能はず。遂に我等及び余の眷屬、無量の諸天をして、此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流を失ひ威光及び勢力有ること無からしむ。悪趣を増長し、人天を損減し、生死の河に墜ち、涅槃の路に乖かん。

世尊、我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等、斯の如きの事を見て、其の国土を捨てて擁護の心無けん。但我等のみ是の王を捨棄するに非ず。必ず無量の国土を守護する諸大善神有らんも、皆悉く捨てせん。

既に捨離し已りなば、其の国に当に種々の災禍有つて、国位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無く、唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有り。互に相讒諂し、枉げて辜無きに及ばん。疫病流行し、彗星数出で、兩日並び現じ、薄蝕恒無く、黒白の二虹不祥の相を表し、星流れ、地動き、井の内より声を発し、暴雨・悪風時節に依らず。常に飢饉に遭ひて苗実も成らず。多く他方の怨賊有りて、国内を侵掠し、人民諸の苦悩を受け、土地に所樂の処有ること無けん。已上。

天集經に云く、

仏法実(まこと)に隠没(かくもつ)せば、鬚髮(すはつ)爪(つめ)皆(みな)長(なが)く、諸法(しよほふ)も亦(また)忘失(わすれ)せん。当(ま)の時(とき)虚空(こくう)の中(なか)に大(おほい)なる声(こゑ)ありて地(ち)に震(ふる)ひ、一切(いっさい)皆(みな)遍(あまね)く動(どう)ぜんこと、猶(なほ)水上(すゐじやう)輪(りん)の如(ごと)くならん。城壁(じやうへき)破(やぶ)れ落(お)ち下(くだ)り、屋宇(おくう)悉(ことごと)く圯(やぶ)れ拆(さ)け、樹林(じゆりん)の根(ね)・枝(えだ)・葉(は)・華(は)・葉(は)・菓(くわ)の藥(やく)尽(つ)きん。唯(ただ)淨(じやう)居(き)天(てん)を除(ぞ)いて、欲界(よくがい)の一切(いっさい)処(しよ)の七味(しちみ)・三精(さんしやう)氣(き)損(そん)滅(めつ)して余(あま)有(あ)ること無(な)けん。解脫(げだつ)の諸(しよ)の善論(ぜんろん)当(ま)の時(とき)に一切(いっさい)尽(つ)きん。生(しやう)ずる所(ところ)の華菓(けか)の味(あじ)希(せう)少(せう)にして、亦(また)美(み)からず。諸有(しよいう)の井泉池(せいせんち)も一切(いっさい)悉(ことごと)く枯涸(こかく)し、土地(とち)悉(ことごと)く鹹鹵(かんる)し、敵裂(てきれつ)して、丘澗(くけん)と成(な)らん。諸山(しよざん)皆(みな)焦(せう)燃(ねん)して、天龍(てんりう)も雨(あめ)を降(ふ)らさず。苗稼(めうけ)皆(みな)枯(こ)死(し)、生(お)ふる者(もの)皆(みな)死(し)れ尽(つ)きて、余(あ)草(そう)更(さら)に生(しやう)ぜず。土(つち)を雨(あめ)し、皆(みな)昏闇(こんあん)にして、日月(にちげつ)明(あ)るを現(げん)ぜず。四方(しほう)皆(みな)亢旱(かうかん)し、數(しばしば)諸(しよ)の惡瑞(あくずい)を現(げん)ぜん。

十不善業道(じふぜんごうどう)、貪瞋痴(とんじんち)倍(ばい)増(ぞう)し、衆生(じゆじやう)の父母(ふぼ)に於(お)ける、之(これ)を觀(み)ること獐鹿(しやうろく)の如(ごと)くならん。衆生(じゆじやう)及(およ)び壽命(じゆみやう)・色力(しきりき)・威樂(いらく)滅(めつ)じ、人天(にんでん)の樂(らく)を遠(おん)離(り)して、皆(みな)悉(ことごと)く惡道(あくどう)に墮(お)ちん。是(かく)の如(ごと)き不善業(ふぜんごう)の惡王(あくわう)・惡比丘我(あくびくわが)が正法(しやうぽう)を毀壞(きゑ)して、天人(てんにん)の道(みち)を損滅(そんめつ)せん。諸天善神(しよてんぜんじん)、王(わう)の衆生(じゆじやう)を悲愍(ひみん)する者(もの)、此(こ)の濁惡(ぢやくあく)の國(くに)を棄(す)てて、皆(みな)悉(ことごと)く余方(よほう)に向(むか)はん。已上(いじやう)。

仁王經に云く、

国土(こくど)乱(らん)れん時(とき)は先(ま)づ鬼神(きじん)乱(らん)る。鬼神(きじん)乱(らん)るが故(ゆゑ)に万民(ばんみん)乱(らん)る。賊來(ぞくきた)つて國(くに)を劫(おびや)かし、百姓(ひやくせい)亡(む)喪(さう)し、臣(しん)・君(くん)・太子(たいし)・王子(わうじ)・百官(ひやくくわん)共(ども)に是(ぜ)非(ひ)を生(しやう)ぜん。天地(てんち)怪(け)異(い)し、二十八宿(にじふはつしゆく)・星道(せいどう)・日月(にちげつ)時(とき)を失(う)し、度(と)を失(う)し、多(おほ)く賊(ぞく)の起(おこ)ることあらん。

亦(また)云(い)く、

我(われ)今(いま)五眼(ごげん)をもつて明(あ)かに三世(さんぜ)を見るに、一切(いっさい)の國王(こくわう)は皆(みな)過(か)去(こ)の世(よ)に五百(ごひやく)の仏(ほとけ)に侍(つか)へしに由(よ)りて、帝王(ていわう)主(しゆ)と為(な)ることを得(え)たり。是(これ)れを為(もつ)て一切(いっさい)の聖人(せいじん)・羅漢(らかん)、而(しか)も為(な)るに彼(か)の國土(こくど)の中(なか)に來(ら)い生(しやう)して、大(だい)利(り)益(やく)を作(な)さん。若(も)し王(わう)の福(ふく)盡(つ)きん時(とき)は、一切(いっさい)の聖人(せいじん)皆(みな)為(な)れ捨(す)て去(さ)らん。若(も)し一切(いっさい)の聖人(せいじん)去(さ)る時(とき)は、七難(しちなん)必(かなら)ず起(おこ)らん。已上(いじやう)。

藥師經に云く、

若(も)し刹帝利(せつていり)・灌頂(かんぢやう)王(わう)等(とう)の災難(さいなん)起(おこ)らん時(とき)、所(い)謂(わ)人(にん)衆(しゆ)疾疫(じつえき)の難(なん)・佗國(たこく)侵逼(しんぴつ)の難(なん)・自界(じがい)叛逆(はんぎやく)の難(なん)・星宿(せいしゆく)變怪(へんげ)の難(なん)・日月(にちげつ)薄蝕(はくしやく)の難(なん)・非時(ひじ)風雨(ふうう)の難(なん)・過時(かじ)不雨(ふう)。

の難あらん。已上。

仁王經に云く、

大王、吾が今化する所は、百億の須弥、百億の日月あり。一一の須弥に四天下有り。其の南閻浮提に、十六の大国、五百の中国、十千の小国有り。其の国土の中に、七の畏るべき難有り。一切の国王、是れを難と為すが故に。云何なるを難と為す。

日月度を失ひ、時節返逆し、或いは赤日出で、黒日出で、二三四五の日出で、或いは日蝕して光なく、或いは日輪一重二三四五重輪現するを一の難と為すなり。

二十八宿度を失ひ、金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・彗星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星、是の如き諸星各変現するを二の難と為すなり。

大火国を焼き、万姓焼き尽し、或いは鬼火・龍火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん。是の如く変怪するを三の難と為すなり。

大水百姓を漂没し、時節反逆し、冬雨ふり、夏雪ふり、冬の時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水・黒水・青水を雨らし、土山・石山を雨らし、沙・礫・石を雨らし、江河逆に流れ、山を浮べ、石を流す。是の如く変ずる時を四の難と為すなり。

大風万姓を吹き殺し、国土・山河・樹木一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん。是の如く変ずるを五の難と為すなり。

天地・国土亢陽し、炎火洞燃して百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して万姓滅尽せん。是の如く変ずる時を六の難と為すなり。

四方より賊来りて国を侵し、内外の賊起り、火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて、百姓荒乱し、刀兵劫起らん。是の如く怪する時を七の難と為すなり。

大集經に云く、

若し国王有つて、無量世に於いて施戒惠を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種ゑる所の無量の善根悉く皆滅失し、其の国に當に、三の不祥事有るべし。

一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神悉く之を捨離せ
ん。其の王教令すれども、人随従せず。常に隣国の為に侵虜せられん。暴火
横に起り、悪風雨多く、暴水増長して人民を吹漂し、内外の親戚其れ共に
謀叛せん。其の王久しからずして当に重病に遇い、寿終るの後は大地獄の中
に生ずべし。乃至、王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官
も亦復是の如くならん。已上。

夫れ四経の文朗かなり。万人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄
りに邪説を信じて正教を弁へず。故に天下世上、諸仏衆経に於いて捨離
の心を生じ、擁護の志無し。仍て善神・聖人国を捨てて所を去る。是を以
て悪鬼・外道災を成し、難を致すなり。

客色を作して曰く、

後漢の明帝は金人の夢を悟つて、白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅
して寺塔の構を成す。尔しより来上一人より下万民に至るまで、仏像を崇
め、経巻を専らにす。然れば則ち、叡山・南都・園城・東寺・四海・一州
・五畿・七道、仏経星の如く羅り、堂宇雲の如く布けり。鷲子の族は則ち
驚頭の月を觀じ、鶴勒の流は亦鷄足の風を伝ふ。誰か一代の教を徧して三宝
の跡を廃すと謂わんや。若し其の証有らば、委しく其の故を聞かん。

主人諭して曰く、

仏閣・甍を連ね、経蔵軒を並ぶ。僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。
崇重年旧り、尊貴日に新なり。但し法師は諛曲にして人倫に迷惑し、王臣は
不覺にして邪正を弁ずること無し。

仁王経に云く、

諸の悪比丘、多く名利を求め、国王・太子・王子の前に於いて、自ら破
仏法の因縁、破国の因縁を説かん。其の王別へずして、此の語を信聴し、
横に法制を作つて仏戒に依らざらん。是を破仏・破国の因縁と為す。已上。

涅槃経に云く、

菩薩、悪象等に於いては心に恐怖すること無かれ。悪知識に於いては怖畏

の心を生ぜよ。悪象の為に殺さるるも三趣に至らず。悪友の為に殺さるれば必ず三趣に至る。已上。

法華經に云く、

悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん。或いは阿練若に、納衣にして空閑に在って、自ら眞の道を行ずと謂って、人間を輕賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣の与に法を説いて、世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん。乃至、常に大衆の中に在って、我等の過を毀らんと欲して、国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて、誹謗して我が悪を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂はん。濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼其の身に入つて我を罵詈毀辱せん。濁世の悪比丘は、仏の方便隨宜所説の法を知らず。悪口して聾瞶し、数数擯出せられん。已上。

涅槃經に云く、

我涅槃の後、無量百歳に、四道の聖人悉く復涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於いて、当に比丘有るべし。像を持律に似せ、少かに經を誦誦し、飲食を貪嗜して其の身を長養し、袈裟を着すと雖も、猶獵師の細めに視て徐ろに行くが如く、猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱へん、我羅漢を得たりと。外には賢善を現はし、内には貪嫉を懷かん。唾法を受けたる婆羅門等の如し。実には沙門に非ずして沙門の像を現はし、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。已上。

文に就いて世を見るに、誠に以て然なり。悪侶を誡めずんば、豈善事を成さんや。

客猶憤りて曰く、

明王は天地に因つて化を成し、聖人は是非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の帰する所なり。悪侶に於いては、明王信ずべからず。聖人に非ずんば賢哲仰ぐべからず。今賢聖の尊重せるを以て、則ち龍象の軽からざるを知る。何ぞ妄言を吐いて、強ちに誹謗を成す。誰人を以て悪比丘と謂うや。委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、

後鳥羽院の御宇に法然といふもの有り、
選択集を作れり。則ち一代の
聖教を破し、遍く十方の衆生を迷はす。

其の選択に云く、

道綽・聖道・浄土の二門を立てて、而も聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文。初に聖道門とは、之に就いて二あり。乃至、之に准じて之を思ふに、応に密大及以実大を存すべし。然れば則ち今真言・信心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論、此等八家の意正しく此に在るなり。

曇鸞法師の往生論の注に云く、

謹んで案ずるに龍樹菩薩の十住毘婆沙に云く、菩薩阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一は難行道、一は易行道。此の中の難行道とは、即ち是れ聖道門なり。易行道とは即ち是れ浄土門なり。浄土宗の学者、先づ須らく此の旨を知るべし。設ひ先に聖道門を学べる人と雖も、若し浄土門に於いて、其の志有らば、須らく聖道を棄てて浄土に帰すべし。

又云く、

善導和尚、正・雑二行を立て、雑行を捨てて正行に帰するの文。第一に読誦雑行とは、上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外、大小乗・顯密の諸經に於いて受持し読誦するを悉く読誦雑行と名く。第三に禮拜雜行とは、上の弥陀を禮拜するを除きて已外、一切の諸仏・菩薩等及び諸の世天等に於いて、禮拜恭敬するを悉く禮拜雜行と名く。

私に云く、此の文を見るに、須らく雑を捨てて、専を修すべし。豈百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜行に執せんや。行者能く之を思量せよ。

又云く、

貞元の入蔵録の中に、始め大般若經六百卷より、法常住經に終るまで、顯密の大乗經、惣じて六百三十七部二千八百八十三卷なり。皆須らく読誦大乘の一句に撰すべし。当に知るべし。隨他の前には暫く定散の門

を開くと雖も、随自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉じざるは、唯是れ念仏の一門なり。

又云く、

念仏の行者必ず三心を具足すべきの文。觀無量寿經に云く、同經の疏に云く、

問ふて曰く、若し解行の不同・邪雜の人等有つて、外邪・異見の難を防がん。或いは行くこと一分・二分するに群賊等喚び廻すとは、即ち別解・別行の悪見の人等に喩ふ。

私に云く、又此の中に一切の別解・別行・異学・異見等と言ふは、是れ聖道門を指すなり。已上。

又最後結句の文に云く、

夫れ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には且く聖道門を闔いて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正・雜二行の中には且く諸の雜行を抛つて、選んで応に正行に歸すべし。已上。

之に就いて之を見るに、曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・浄土・難行・易行の旨を建て、法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷、一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、皆聖道・難行・雜行等に擲して、或いは捨て、或いは閉じ、或いは闔き、或いは抛つ、この四字を以て多く一切を迷はし、剩へ三国の聖僧・十方の仏弟を以て皆群賊と号し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の浄土三部經の唯除五逆誹謗正法の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の若人失信毀謗此經、乃至其人命終入阿鼻獄の誠文に迷ふ者なり。

於是に代末代に及び、人、聖人に非ず。各冥衢に容つて並びに直道を忘る。悲しいかな瞳瞭を樹てず。痛ましいかな徒らに邪信を催す。故に上國王より下土民に至るまで、皆經は浄土三部の外の經無く、仏は弥陀三尊の外に仏無しと謂へり。

仍つて伝教・義真・慈覚・智証等、或いは万里の波濤を涉つて渡せし所の

聖教、或いは一朝の山川をめぐつて崇むる所の仏像、若しは高山の巔に華界を建てて以て安置し、若しは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す。釈迦・薬師の光を並ぶるや、威を現当に施し、虚空・地藏の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に国主は郡郷を寄せて、以て灯燭を明かにし、地頭は田園を充てて以て供養に備ふ。

而るを法然の選択に依つて、則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び、付属を抛つて東方の如来を闇き、唯四巻三部の經典を専らにして、空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て、弥陀の堂に非ざれば、皆供仏の志を止め、念仏の者に非ざれば早く施僧の懐を忘る。故に仏堂零落して瓦松の煙老い、僧坊荒廃して庭草の露深し。然りと雖も各護惜の心を捨て、並に建立の思を廢す。是を以て住持の聖僧行いて歸らず。守護の善神去りて来ることなし。是れ偏に法然の選択に依るなり。

悲しいかな数十年の間百千万の人、魔縁に蕩かされて多く仏教に迷へり。傍を好んで正を忘る、善神怒りを成さざらんや。円を捨てて偏を好む。悪鬼便りを得ざらんや。如かず、彼の万祈を修せんより、此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、

我が本師釈迦文、浄土の三部經を説きたまひてより以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に歸し、道綽禪師は涅槃の広業を闇きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛つて専修を立て、恵心僧都は諸經の要文を集めて念仏の一行を宗とす。弥陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人其れ幾ばくぞや。

就中法然聖人は、幼少にして天台山に昇り、十七にして六十巻に涉り、並びに八宗を究め、具に大意を得たり。其の外一切の經論を七遍反覆し、章疏伝記究め看ざること莫し。智は日月に齊しく、徳は先師に越えたり。然りと雖も猶出離の趣に迷い、涅槃の旨を弁へず。故に徧く觀、悉に鑿み、深く思ひ、遠く慮つて、遂に諸經を抛つて専ら念仏を修す。其の上一夢の靈応を蒙つて四裔の親疎に弘む。故に或いは勢至の化身と号し、或いは善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女は歩みを運ぶ。

しかしより来、春秋推し移り、星霜相積れり。

而るに忝なくも釈尊の教を疎かにして、恣に弥陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、強ひて先師を毀り、更に聖人を罵るや。毛を吹きて疵を求め、皮を剪つて血を出す。昔より今に至るまで此の如き悪言未だ見ず。惶るべし。慎むべし。罪業至つて重し、科條争でか遁れん。对座猶以て恐れ有り。杖を携へて則ち帰らんと欲す。

主人咲み、止めて曰く、

辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷廁に忘る。善言を聞いて悪言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑つて悪侶に擬す。其の迷ひ誠に深く、其の罪淺からず。事の起りを聞け、委しく其の趣を談ぜん。

釈尊説法の内、一代五時の間、先後を立てて権実を弁ず。而るに曇鸞道綽・善導既に権に就いて実を忘れ、先に依りて後を捨つ。未だ仏教の淵底を探らざる者なり。就中法然其の流を酌むと雖も、其の源を知らず。

所以は何ん。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、並に一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の字を置いて、一切衆生の心を薄す。是れ偏に私曲の詞を展べて、全く仏經の説を見ず。妄語の至り、悪口の科、言ひても比ひ無く、責めても余りあり。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の選択を貴む。故に浄土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一仏を仰いで諸仏を忘る。誠に是れ諸仏・諸經の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。此の邪教広く八荒に弘まり、周く十方に遍す。

抑も近年の災を以て往代を難ずるの由、強ちに之を恐る。聊か先例を引いて汝の迷ひを悟すべし。

止觀の第二に史記を引いて云く、

周の末に被髮袒身にして礼度に依らざる者あり、と。

弘決の第二に此の文を釈するに、左伝を引いて曰く、

初め平王の東遷するや、伊川に被髮の者の野に於いて祭るを見る。識者の曰

く、百年に及ばじ、其の礼先づ亡びぬ、と。

爰に知んぬ。徴前に顕はれ、災後に致ることを。

又、阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に教ひ、奴苟相辱しむる者を方に自然に達すといひ、樽節競持する者を呼んで田舎と為す。司馬氏の滅ぶる相と為す。已上。

又案ずるに、慈覺大師の入唐巡礼記に云く、

唐の武宗皇帝の會昌元年、勅して章敬寺の鏡霜法師をして、諸寺に於いて弥陀念仏の教を伝へしむ。寺毎に三日巡輪すること絶えず。同二年、回鶻国の軍兵等唐の境を侵す。同三年、河北の節度使忽ち乱を起す。其の後大蕃国更命を拒み、回鶻国重ねて地を奪ふ。凡そ兵乱は秦項の代に同じく、災火は昆里の際に起る。何に況んや武宗大いに仏法を破し、多く寺塔を滅ぼせるをや。乱を撲むること能はずして、遂に以て事有り。已上取意。

此を以て之を惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。然れば則ち大唐に例を残し、吾が朝に証を顕はす。汝疑ふこと莫れ。汝怪しむこと莫れ。唯須らく凶を捨て、善に歸し、源を塞ぎ、根を截るべし。

客聊か和らいで曰く、

未だ淵底を究めざれども、数其の趣を知る。但し華洛より柳營に至るまで、釈門に枢榘在り、仏家に棟梁在り。然れども未だ勸状を進らせず。上秦に及ばず。汝賤しき身を以て輒く莠言を吐く。其の義余り有れども、其の理謂はれ無し。

主人の曰く、

予少量為りと雖も、忝なくも大乘を学べり。蒼蠅驥尾に附して万里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一仏の子と生れて諸経の王に事ふ。何ぞ仏法の衰微を見て心情の衰惜を起させらんや。

其上涅槃經に云く、

若し善比丘あつて、法を懷る者を見て、置いて呵責し、駈遣し、拳処せずん

ば、當に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。若し能く駈遣し、呵責し、拳処せば、是れ我が弟子、眞の声聞なり。余、善比丘の身為らずと雖も、仏法中怨の責めを遁れんが為に、唯大綱を撮って粗一端を示す。

其の上へぬる元仁年中、延暦・興福の両寺より、度々秦聞を経て、勅宣・御教書を申し下し、法然の選択の印板を大講堂に取り上げ、三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしめ、法然の墓所に於いては、感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ。其の門弟隆觀・聖光・成覚・薩生等は遠國に配流せられ、その後未だ御勘気を許されず。豈未だ勘状を進らせずと云んや。

客則ち和らいで曰く、

經を下し僧を誘ふること、一人として論じ難し。然れども大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、並に一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の四字に載す。「其の」詞勿論なり。其の文顯然なり。此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成す。迷つて言うか。覺つて語るか。賢愚弁へず。是非定め難し。

但し災難の起りは選択に因るの由、盛んに其の詞を増し、彌其の旨を談ず。所詮、天下泰平国土安穩は君臣の樂ふ所、士民の思ふ所なり。夫れ國は法に依つて昌え、法は人に因つて貴し。國亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき。法を誰か信ずべけんや。先づ國家を祈つて須らく仏法を立つべし。若し災を消し、難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、

余は是れ頑愚にして、敢へて賢を存せず。唯經文に就いて聊か所存を述べん。抑も治術の旨、内外の間、其の文幾多ぞや。具に挙ぐべきこと難し。但し仏道に入つて数愚案を廻らすに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば、國中安穩にして天下泰平ならん。

則ち涅槃經に云く、

仏の言はく、唯一人を除いて余の一切に施さば、皆讚歎すべし。純陀問ふて言く、云何なるをか名づけて唯一人を除くと為すや。仏の言はく、此の經の中に説く所の如きは破戒なり。純陀復言く、我今未だ解せず。唯願はく

は之を説きたまへ。仏純陀に語つて言はく、破戒とは謂く、一闍提なり。其の余の在所一切に布施するは、皆讚歎すべし。大果報を獲ん。純陀復問ひたてまつる。一闍提とは其の義云何。仏の言はく、純陀、若し比丘及び比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて、麁惡の言を發して正法を誹謗せん。是の重業を造つて永く改悔せず、心に懺悔無からん。是の如き等の人を名づけて一闍提の道に趣向すと為す。若し四重を犯し、五逆罪を作り、自ら定めて是の如き重事を犯すと知れども、而も心に初めより怖畏・懺悔無く、肯えて発露せず。彼の正法に於いて永く護惜建立の心無く、毀皆輕賊して言に過咎多からん。是の如き等をも亦一闍提の道に趣向すと名づく。唯此の如き一闍提の輩を除いて、其の余に施せば、一切讚歎すべし。

又云く、

我往昔を念ふに、閻浮提に於いて大國の王と作れり。名を仙予と曰ひき。大乘經典を愛念し、敬重し、其の心純善にして麁惡嫉恚有ること無し。善男子、我尓の時に於いて心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已つて即時に其の命根を断つ。善男子、是の因縁を以て是より已來地獄に墮ちず。

又云く、

如來昔國王と為りて、菩薩道を行ぜし時、余所の婆羅門の命を断絶しき。

又云く、

殺に三有り。謂く下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を除く。下殺の因縁を以て地獄・畜生・餓鬼に墮し、具に下の苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生に微の善根有り。是の故に殺さは具に罪報を受く。中殺とは凡夫人より阿那含に至るまで是を名づけて中と為す。是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮ち、具に中の苦を受く。上殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に墮つ。善男子、若し能く一闍提を殺すことあらん者は、則ち此の三種の殺の中に墮ちず。善男子、彼の諸の婆羅門等は、一切皆是れ一闍提なり。已上。

ほとけ 仏、波斯匿王に告げたまはく、是の故に諸の国王に付属して、比丘・比丘尼に付属せず。何を以ての故に。王の威力無ければなり。已上。

涅槃經に云く、

今無上の正法を以て諸王・大臣・宰相及び四部の衆に付属す。正法を毀る者をば大臣・四部の衆、当に苦治すべし。

又云く、

仏の言はく、迦葉、能く正法を護持する因縁を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修せずして、応に刀剣・弓箭・鉾槊を持すべし。

又云く、

若し五戒を受持せん者有るも、名づけて大乘の人と為すことを得ざるなり。五戒を受けざれども、正法を護るを為て乃ち大乘と名づく。正法を護る者は当に刀剣・器仗を執持すべし。刀杖を持すと雖も、我是等を説いて、名づけて持戒と曰はん。

又云く、

善男子、過去の世に此の拘尸那城に於いて、仏の世に出でたまふこと有りき。歡喜増益如来と号したてまつる。仏涅槃の後、正法世に住すること無量億歳なり。余の四十年仏法の末、尔の時に一の持戒の比丘有り。名を覚徳と曰ふ。尔の時に多く破戒の比丘有り。是の説を作すを聞き、皆悪心を生じ、刀杖を執持して、是の法師を逼む。是の時の国王、名を有徳と曰う。是の事を聞き已って、護法の為の故に、即便説法者の所に往至して、是の破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す。

尔の時に説法者厄害を免ることを得たり。王、尔の時に於いて、身に刀剣・箭槊の瘡を被り、体に完き処は芥子の如き許りも無し。尔の時に覚徳尋いで王を讃めて言く、善哉善哉、王今眞に是れ正法を護る者なり。当來の世に此の身当に無量の法器と為るべし。

王、是の時に於いて、法を聞くことを得已つて、心大いに歡喜し、尋いで即ち命終して阿闍佉の國に生じ、而も彼の佉の為に第一の弟子と作る。其の王の將從・人民・眷屬の戰鬪すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿闍佉の國に生ず。覺徳比丘却つて後、壽終つて亦阿闍佉の國に往生することを得、彼の佉の為に聲聞衆の中の第二の弟子と作る。若し正法の尽きんと欲すること有らん時、应当に是の如く受持し擁護すべし。

迦葉、尔の時の王とは則ち我が身是なり。説法の比丘は迦葉佉是なり。迦葉、正法を護る者は、是の如き等の無量の果報を得ん。是の因縁を以て、我今日に於いて種々の相を得て、以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成ず。佉迦葉菩薩に告げたまはく、是の故に法を護る優婆塞等は、応に刀杖を執持して擁護することは是の如くすべし。

善男子、我涅槃の後、濁悪の世に、国土荒乱し、互に相抄掠し、人民飢餓せん。尔の時に多く飢餓の為の故に発心出家するもの有らん。是の如き人を名づけて禿人と為す。是の禿人の輩、正法を護持するを見て、駈逐して出さしめ、若しは殺し、若しは害せん。是の故に我今、持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依つて以て伴侶と為すことを聽す。刀杖を持つと雖も、我是等を説いて名づけて持戒と曰ん。刀杖を持つと雖も、応に命を断つべからず。

法華經に云く、

若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至、其の人命終して阿鼻獄に入らん。已上。

夫れ經文顕然なり。私の詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を謗る者は無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に墮ちて、永く出る期無けん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つ。謗法を禁ずる者は定めて不退の位に登る。所謂覺徳とは是れ迦葉佉なり。有徳とは則ち釈迦文なり。法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり。其の禁實に重し。誰か帰仰せざらんや。

而に謗法の族正道の人を忘れ、剩へ法然の選択に依つて弥愚痴の盲瞽を増す。是を以て或いは彼の遺体を忍んで木画の像に露はし、或いは其の妄説を信じて莠言の模を彫り、之を海内に弘め、之を塚外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其の家風、施す所は則ち其の門弟なり。

然る間、或いは釈迦の手指を切りて弥陀の印相を結ばせ、或いは東方如来の雁宇を改めて西土教主の鵝王を居系、或いは四百余回の如法経を止めて西方浄土の三部経と成し、或いは天台大師の講を停めて善導の講と為す。此の如きの群類其れ誠に尽し難し。

是れ破仏に非ずや。是れ破法に非ずや。是れ破僧に非ずや。此の邪義は則ち選択に依るなり。嗟呼悲しいかな、如来誠諦の禁言に背くこと。哀れなり、愚侶迷惑の麤語に随ふこと。早く天下の静謐を思はば、須らく國中の謗法を断つべし。

客の曰く、

若し謗法の輩を断じ、若し仏禁の違を絶たんには、彼の経文の如く斬罪に行ふべきか。若し然らば殺害相加へ、罪業何んが為んや。

則ち大集経に云く、

頭を剃り、袈裟を著せば、持戒及び毀戒をも、天人彼を供養すべし。則ち為れ我を供養するなり。是れ我が子なり。若し彼を搗打すること有らば、則ち為れ我が子を打つなり。若し彼を罵辱せば、則ち為れ我を毀辱するなり、と。

料り知んぬ。善悪を論ぜず、是非を択ぶこと無く、僧侶為るに於いては供養を展ぶべし。何ぞ其の子を打辱して、忝なくも其の父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや、久しく阿鼻の焰に咽ぶ。先証斯れ明かなり。後昆最も恐れあり。謗法を誡むるに似て、既に禁言を破る。此の事信じ難し。如何が意を得んや。

主人の曰く、

客明かに経文を見て猶斯の言を成す。心の及ばざるか。理の通ぜざるか。

全く仏子を禁むるに非ず。唯偏に謗法を悪むなり。

夫れ釈迦の以前の仏教は其の罪を斬ると雖も、能仁の以後の経説は則ち其の施を止む。然れば則ち四海万邦の一切の四衆、其の悪に施さずして、皆此の善に帰せば、何なる難か並び起り、何なる災か競ひ来らん。

客則ち席を避け襟を刷って曰く、

仏教斯れ区にして旨趣窮め難く、不審多端にして理非明かならず。但し法然聖人の選択は現在なり。諸仏・諸経・諸菩薩・諸天等を以て捨閉閣抛に載せたる、其の文顯然なり。茲に因つて聖人国を去り、善神所を捨て、天下飢渴し、世上疫病す。今主人広く経文を引いて明かに理非を示す。故に妄執既に翻り、耳目数朗かなり。

所詮、国土泰平天下安穩は一人より万民に至るまで好む所なり。樂ふ所なり。早く一闡提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、仏海の白浪を収めて、法山の緑林を截らば、世は義農の世と成り、国は唐虞の国と為らん。然して後、法水の浅深を斟酌し、仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰く、

鳩化して鷹と為り、雀変じて蛤と為る。悦ばしいかな、汝蘭室の友に交つて、麻畝の性と成る。誠に其の難を顧みて、専ら此の言を信ぜば、風和らぎ浪静かにして、不日に豊年ならんのみ。但し人の心は時に随つて移り、物の性は境に依つて改まる。譬へば猶水中の月の波に動き、陣前の軍の剣に靡くがごとし。汝当座には信ずと雖も、後定めて永く忘れん。若し先づ国土を安んじ、現当を祈らんと欲せば、速かに情慮を回らし念いで対治を加へよ。

所以は何ん。

薬師經の七難の内、五難忽ちに起り二難猶残れり。所以、他国侵逼の難、自界叛逆の難なり。

大集經の三災の内、二災早く顕はれ、一災未だ起らず。所以兵革の災なり。金光明經の内、種々の災禍一々に起ると雖も、他方の怨賊国内を侵掠する、此の災未だ露はれず。此の難未だ来らず。

仁王経の七難の内、六難今盛んにして、一難未だ現はれず。所以四方の賊来て国を侵すの難なり。加之

鬼土乱れん時は先づ鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る、と。

今此の文に就いて、具に事の情を案ずるに、百鬼早く乱れ、万民多く亡ぶ。先難はれ明かなり。後災何ぞ疑はん。若し残る所の難、悪法の科に依つて並び起り、競ひ来らば其の時何んが為んや。

帝王は国家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊来て其の国を侵逼し、自界叛逆して其の地を掠領せば、豈驚かざらんや。豈騒がざらんや。国を失ひ、家を滅せば、何れの所にか世を遁れん。汝須らく一身の安堵を思はば、先づ四表の静謐を禱るべきか。

就中人の世に在るや、各後生を恐る。是を以て或いは邪教を信じ、或いは謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを悪むと雖も、而も猶佛法に帰することをおはれむ。何ぞ同じく信心の力を以て、妄りに邪義の詞を宗ばんや。若し執心翻らず亦曲意猶存せば、早く有為の郷を辞して、必ず無間の獄に墮ちなん。所以は何ん。

大集経に云く、

若し国王有りて、無量世に於いて施・戒・恵を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、是の如く種系る所の無量の善根悉く皆滅せん。乃至、其の王久しからずして当に重病に遇ひ、寿終つた後大地獄に生ずべし。王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡主・宰官も亦復是の如くならん。

仁王経に云く、

人、仏教を懷らば復孝子無く、六親不和にして天神も祐げず。疾疫・悪鬼日に来て侵害し、災怪首尾し連禍縦横し、死しては地獄・餓鬼・畜生に入らん。若し出でて人と為らば、兵奴の果報ならん。響の如く影の如く、人の夜書するに火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦復是の如し。

法華経第二に云く、

若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、乃至、其の人命終して阿鼻獄に入る。

又同經第七卷不輕品に云く、

千劫阿鼻地獄に於いて大苦惱を受く。

涅槃經に云く、

善友を遠離して正法を聞かず、悪法に住せば、是の因縁の故に沈没して、阿鼻地獄に在つて受くる所の身形縦横八万四千「由延」ならん。

広く衆經を披きたるに、専ら謗法を重しとす。悲しいかな皆正法の門を出でて、深く邪法の獄に入る。愚かなり各悪教の綱に懸つて、鎮に謗教の網に纏はる。此の朦霧の迷ひ、彼の盛焰の底に沈む。豈愁へざらんや。豈苦しからざらんや。

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり。仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壞れんや。国に衰微無く、土に破壊無くんば、身は是れ安全にして、心は是れ禅定ならん。此の詞、此の言、信すべく崇むべし。

客の曰く、

今生後生、誰か慎まざらん。誰か和まざらん。此の經文を披いて具に仏語を承るに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。我一仏を信じて諸仏を抛ち、三部經を仰いで諸經を闇きしは、是れ私曲の思ひに非ず、則ち先達の詞に隋ひしなり。十方の諸人も亦復是の如くなるべし。

今世には性心を勞し、來生には阿鼻に墮ちんこと文明かに、理詳かなり、疑ふべからず。弥貴公の慈誨を仰いで、益愚客の痴心を開き、速かに対治を廻らして、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ、更に没後を扶けん。唯我信ずるのみに非ず、又他の誤りを誡めんのみ。

安国論奥書

文応元年太歳庚申之を勘ふ。正嘉より之を始めてより、文応元年に勘へ畢ぬ。

去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月廿三日、戌亥の尅の大地震を見て之を勘ふ。其の後文応元年太歳庚申七月十六日を以て宿谷禅門に付して、故最明寺入道殿に奉れり。

其の後、文永元年太歳甲子七月五日大明星の時、弥々此の災の根源を知る。

文応元年太歳庚申より文永五年太歳戊辰後の正月十八日に至るまで九箇年を経て、西方大蒙古国より我朝を襲ふべきの由、牒状之を渡す。又同六年、重ねて牒状之を渡す。

既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに未来も亦然るべきか。此の書は徴有る文なり。是れ偏に日蓮の力に非ず。法華経の真文の感応の至す所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。